

産業循環論への一視点

——「周期的恐慌の物質的基礎」について——

沢 田 幸 治

一 はじめに

産業革命を経て機械制大工業が成立して以来、資本主義の発展Ⅱ運動は恐慌をその一環として含む循環、産業循環という形態をとって行われるようになった⁽¹⁾。資本主義のもとで生産力は飛躍的に発展したが、資本主義は産業循環の一環Ⅱ局面として周期的に発生する恐慌をも持つようになったのである。そして、いうまでもなく恐慌は経済の大混乱——交換価値のうえにうちたてられた生産様式と社会形態の解体であって、⁽²⁾それによって人々は大きな困難に陥し入れられたわけである。それゆえ、恐慌は資本主義的生産様式が生産力の解放Ⅱ発展を真に保障する生産様式ではないということを、この生産様式が永遠Ⅱ自然のそれではないということを証明するものと考えられたわけである。⁽³⁾マルクスにとってこのような恐慌の原因を解明することは、近代市民社会Ⅱ資本主義社会の解剖学たる経済学研究におけるまさに第一級の課題であった。そして、周知のように、彼の経済学研究「プラン」において（世界市場と）恐慌はその最後に属する、いわば全研究の総括をなす地位におかれていたところである。しかし、マルクスによって完成

した恐慌論の体系が与えられなかったこと、これもまた周知のところである。とはいえ、『資本論』その他において、マルクスは資本制生産様式のもとで恐慌が生じる理由を、多くのところでのべている。⁽⁴⁾ それらを手がかりにして、われわれは資本主義のもとでの恐慌の可能性や必然性について考察することができ、事実、多くの研究⁽⁵⁾が発表されてきた。

ところで、冒頭でのべたように、恐慌は産業革命を通じて出来あがってくる機械制大工業の成立以来、産業循環の一環（一局）として、周期的に発生してきた。すなわち、史上最初の近代的恐慌⁽⁶⁾ 全般の過剰生産恐慌といわれる一八二五年恐慌以来、八年から一二年、平均して一〇年の間隔をもって発生してきた。したがって、恐慌の解明ということのうちには、資本主義のもとで恐慌が生じる理由の解明、つまり、その可能性や必然性を追究することだけではなく、恐慌がなぜ周期的に発生するのかということの解明も当然含まなければならない。あるいは、恐慌をその一環⁽⁷⁾ 一局として含む産業循環⁽⁸⁾ 景気循環のメカニズムの解明という課題も含まれることになる。産業循環のメカニズムを知ることによって現局面が循環のどの局面にあり、次にはいかなる局面が到来するかの見透しを立てることができるようになる。もっとも、現在、というより第二次大戦後の循環は、それ以前のように典型的な形態をとってはいないし、恐慌も古典的なそれのような発現形態をとってはいないわけであるが。しかし、そのことはまた現代の資本主義の古典的なそれとの相違を示しているわけであって、そのことの解明のためにも恐慌と循環のメカニズムを——古典的なそれを——知ることが必要であろう。そのことが現代の恐慌と循環を理解するための一基準となるからである。このような理由からか、わが国においても、（恐慌と）産業循環に関する研究はかなり精力的に行われてきたところである。そして、最近、再び、それに関するいくつかの貴重な成果があげられている。⁽⁹⁾ しかし、（恐慌と）産業循環についての見解は、今日に至っても論者の間で、なお大きな相違をみせている。それゆえ、現実の事態⁽¹⁰⁾ 循環の

分析をとおして理論構成を試みることに同時に、論者が等しく依拠する古典の検討が今日でもなお必要とされている、といわなければならない。

ところで、古典の検討という場合、マルクスの産業循環に関する叙述の検討は避けておれないわけだが、いくつかの産業循環に関する叙述のうちで、とりわけ多くの論者が注目しているのは、『資本論』二部・二篇・九章（など）でべられている固定資本の独特な回転と、それに規定された回転循環に関する叙述であろう。すなわち「周期的恐慌の一つの物質的基礎」についての叙述であろう。周知のとおり、多くの論者がこの叙述に依拠して周期的恐慌と産業循環についての理論構築を試みているわけだが、しかし、私には多くの論者のそれについての理解を十分納得のいくものとして受け入れることはできない。「周期的恐慌の一つの物質的基礎」の理解は、（恐慌と）産業循環の解明にとって決定的に重要であると思われる以上、この点の検討が今一度行われることも全く無駄なこととはいえないであろう。このことの検討＝考察を本稿では、まず、二・三の論者の見解をみ、ついでマルクスの叙述そのものを見るという順に行ないたいと思う。マルクス自身が実際にどのように考えていたのかをまず正確に知ることが——そのとらえ方の当否をいう前に——必要なことといえようからである。

二 「周期的恐慌の物質的基礎」に関するいくつかの見解

固定資本（資本の固定的成分）の存在のために、資本は長期にわたる回転循環に縛りつけられているわけだが、そして「はじめに」でのべたように、マルクスはこの回転循環によって「周期的恐慌の一つの物質的基礎」が生じるとのべているわけだが、ではいったい、それがどのような意味で「周期的恐慌の物質的基礎」なのかということについての詳しい説明は与えられていない。そして、この理解については論者の間で見解の一致をみているわけではない。し

かし、この叙述Ⅱ命題を産業循環理論の構築のための重要な契機としている諸見解の場合、それぞれの理論構成Ⅱ展開には大きな相違がみられるにもかかわらず、この叙述の理解と、理論構成上におけるその位置づけに関しては、かなり共通した点が存しているといえよう。というのは、ほとんどの論者が、この叙述Ⅱ命題をそれぞれの理論構成の中で次のように位置づけているからである。すなわち、周知のように、機械等の固定資本は一度び投下されると一定期間——例えば十年間——更新されることなく機能し続けることができる。そして、その間自分の価値を生産物に移転し続けるわけだが、したがって一方的な供給Ⅱ売りのみが、これに関する限り行なわれてゆく。(固定資本の側での買いⅡ需要なしの売りⅡ供給)。しかし、耐用年数が過ぎ、それが更新される時には大きな需要が生じることになる。ところで、何らかの理由で——例えば恐慌等により——大量の固定資本の更新や新投資がほぼ同時期に行われたとすれば、固定資本の独特の回転のため(多くの固定資本の寿命がほぼ等しいとすれば)それから一定期間後に——例えば十年後に——再び大量の固定資本の更新投資が行われることになる。そして、そのことは、社会的に大きな需要を生じさせることになる(直接的には固定資本に対して、しかし、間接的にはその他のものに対しても)。多くの論者は固定資本のこのような特徴に注目して、恐慌の周期(や産業循環のありよう)を説明しているからである。すなわち、固定資本のいわば周期的な更新と恐慌の発生周期を関連させてとらえているからである。といっても固定資本の大量の更新から直接に恐慌を導く見解はそれほどないわけだが。多くの論者の見解では、右のことを「周期的恐慌の一つの物質的基礎」とみなしているといつてよいであろう。この点——すなわち「周期的恐慌の一つの物質的基礎」について——を、本稿では、固定資本の独特な回転を考慮に入れて、(恐慌と)産業循環の理論をかなり体系的に構築されている林直道氏と富塚良三氏の見解を例にとつてみることにする。両氏の見解とも、それが発表されたのは大分以前のことになるが、この両見解を「代表的な」見解としてとりあつかうことは現在でも適当であると考えられるからである。固定資

本の回転に焦点をあてて体系的に論を展開されている代表的な見解としての地位を失っていないと考えられるからである。そして、固定資本の投資と更新に関していえば、林氏は固定資本の更新を〈好況——繁栄（初期）とみなす代表的論者であり、富塚氏は〈不況末——好況期〉とする代表的論者であるという点からも、われわれの考察にとって適当であると思われるからである。すなわち、そうした点の相違が、理論構成にどのような相違をひきおこしているかを知るのに便利だからである。

だが、まず、われわれが主として考察の対象とするマルクスの叙述を最初に掲げておこう。

「……前貸資本価値は、いくつもの回転から成る一循環を描かなければならない——しかもこの循環は、充用される固定資本の寿命によって、規定されているのである。

だから、資本主義的生産様式の発展とともに充用される固定資本の価値量と寿命とが増大するにつれて、産業の生命もそれぞれの特殊的投資における産業資本の生命も、多年にわたるものに、つまりたとえば、平均して一〇年になる。一方で固定資本の発達がこの生命を延長するのにたいして、他方では、同様に資本主義的生産様式の発展につれてたえず進展する生産手段の不断の变革によって、この生命が短縮される。したがって、資本主義的生産様式の発展につれて、生産手段の変化も、また、生産手段が物質的に死滅するよりもずっとまえから無形の磨損の結果としてたえず填補される必要も、増大する。大工業の最も決定的な諸部門については、この生命循環は今日では平均して一〇年にわたるものと想定してよい。とはいえ、ここでは特定の年数が問題なのではない。ただ、次のことだけは明らかである。資本がその固定的成分によって縛りつけられている、連結する諸回転から成っていて多年にわたるこのような循環によって、周期的な恐慌の一つの物質的な基礎が生じるのであって、この循環のなかで事業は、弛緩、中位の活気、突進、恐慌、という継起する諸時期を通るのである。なるほど、資本の投下される時期は非常に種々さまざま

である。とはいえ、恐慌はいつでも大きな新投資の出発点をつくりだす。したがって、また——社会全体として見れば——多かれ少なかれ次の回轉循環のための一つの新たな物質的基礎をつくりだすのである。⁽⁸⁾

右の引用が、われわれの考察の主たる対象をなすものであるが、まず、各論者が「周期的恐慌の一つの物質的基礎」ということをどのように理解しているかを、みてみよう。なお、ここでのわれわれの検討は、各論者の見解の全体ではなく、あくまでも「周期的恐慌の一つの物質的基礎」をどのように理解し、各論者の理論の中でそれをどう位置づけているのかという点に限られる。(念のため)

「好況——繁栄期集中更新説の場合——林直道氏の見解」

林氏はすでに二〇年以上も前に『景気循環の研究』(一九五九年、三一書房)において次のように語っている。

「従来のマルクス主義恐慌論の著作では、恐慌についてはその必然性の根拠だけを説き、景気循環についてはこれを事実問題として描写するにとどまる傾向があった。これにたいして、循環の合法性を解明することによって恐慌論を『循環の理論』にまで具体化したというのが本書の企図なのである。ここにいう景気循環とは、もちろん、近代経済学にいう意味でのたんなる景気の変動一般や、またたんなる好況と不況の交替一般と同じではない。それは恐慌を決定的な契機としてもち、不況・活況・繁栄・恐慌という四つの局面Ⅱ段階から構成されるところの、資本主義的諸矛盾の累積・爆発・一時的解決の基本的な単位、資本主義発展の基本的軌道を意味するのである。……したがってわれわれは、循環の合法性の理論的解明という立場に立って目的意識的に理論を再構成し『資本論』がたんに示唆するに止めたり、あるいは未展開におわっている部分をも、必要とあれば真正前からとりあげ、その全面的展開を試み、これを手がかりとして新しい法則の発見に進まなければならない。」

まさに、正当な問題意識といえるだろう。われわれは、こうした問題意識を引き継ぎ、その後の研究成果をとり入

れて理論を展開されている『恐慌の基礎理論』⁽⁹⁾によって林氏が産業循環(景気循環)をどのように説明されているか、そして、その際「周期的恐慌の一つの物質的基礎」という命題をどのように理解されているかをみてみよう。

林氏は、右の著作の第二篇を「恐慌Ⅱ景気循環の再生産構造」の解明にあてられているが「固定資本更新と恐慌の周期性」についてはその第三章においてとりあげている。

さて、それでは林氏はわれわれが『資本論』から引用して先に掲げた叙述についてどのように読まれているだろうか。次のとおりである。すなわち「第一に、大工業の決定的な生産部門では固定資本の寿命は平均して一〇年と『推定してよい』(Man kann annehmen) こと、第二に、そうした寿命をもつ固定資本の回転のなかに周期的恐慌の物質的基礎がひそんでいること、第三に、恐慌は一大新投資の出発点をなすこと」⁽¹⁰⁾——この三つのことをそこからまず読みとられる。そして、その上で次のように問題を提出されている。「さてそれでは、この固定資本回転と恐慌の周期性との連繋は論理的にいか把握されるべきか?」と。ところが「困ったことにマルクスは、この点についてこれ以上何の説明も与えてはいないのである。そしてこの点の説明を行なうかわりに『恐慌は一大新投資の出発点をなす』という命題をそのあとにつけ加えているだけなのである」と記した上で、次のように論じられている。「この命題は、当面の問題の全内容を示すものではなく、そのうちの、重要ではあるが一つの論点、一つの内容を示すにすぎない。恐慌の周期性を解明するためには、なおこれ以外に一連の重要な論点、内容が考えられねばならないのである。」⁽¹¹⁾と。このようにのべられる理由は、次のことによっている。すなわち「従来この問題を掘りさげて考えようとした人々の多くは、この『恐慌Ⅱ一大新投資の出発点』という命題だけを頼りにした傾向がある。しかも私見によれば、多くの場合、この命題の含意が正しくとらえられているとはいいがたい。すなわち、多くの人々は、恐慌の次に、すなわち循環の始点に、固定資本投下の『出発点』が与えられるだけではなくその一大集中が現出するというふうにこの命題を

解釈し、そしてこのことと固定資本の回転期間が一〇年だということとを組合せることによって、この固定投資の集中時点から数えて一〇年目における恐慌の勃発を、何とか論証しようと苦吟してきたのである。だが、これでは恐慌の周期性の謎は解けないといわざるをえない。けだし、この論法でゆけば、循環の始点から数えて一〇年目に固定資本のいっせい更新期がやってくることのなかに恐慌要因を見いださねばならぬ羽目におちいるが、ただちにわかるとおり、固定資本のいっせい更新期の到来とは、労働手段にたいする需要が急激に高まること、労働手段生産部門を中心に大ブームがおこる可能性を意味するのであって、それは何ら恐慌の要因などではなく、反対に景気高揚の要因をなすものであり、したがってこれでは一〇年目ごとの恐慌の爆発がまったく証明されないからである。⁽¹²⁾

右のように林氏は、エルスナー等⁽¹³⁾に代表される従来の見解の不合理な説明を適切に指摘されたわけだが、では、林氏自身はこの点をどのように合理的に説明されているだろうか。

氏は、マルクスがいう「一大新投資の出発点をなす」という命題の意味を次の両面を含むものとして把握する。すなわち「恐慌は、まず旧来の循環の物質的基礎を崩壊させ、ついで、新しい循環の物質的基礎の形成に刺激を与え、⁽¹⁴⁾という、両面の役割を演じる」という意味にとらえる。

「恐慌は、さまざまな投資の流れを強力的に中断しておいて、しかもやがてまたこれを再開させる。これによって回転期間の異なるさまざまな固定資本の投資が、恐慌を契機として再編され、同じ時点に勢揃いさせられる。こうして恐慌を境目として新しい循環の物質的基礎が形成されてゆくのである。⁽¹⁵⁾」

「恐慌は一大新投資の出発点をなす」という命題の意味を右のように把握された上で、氏はさらに、「循環の物質的基礎そのものを全面的に把握するためには、なお次の諸点を明らかにすることが必要である」と論を進められてゆくのである。

「第一に、恐慌は一大新投資の出発点だということは、循環の始点において物質的基礎の形成が出発点を与えられる、開始されるということなのであって、この時点における投資の大集中をいったものではない。物質的基礎そのものは、ここからはじまって活況へ、さらに活況から繁栄の局面へと向かうにつれて、ますます膨張してゆく。

第二に、この物質的基礎の膨張過程はたんに拡張投資Ⅱ追加的固定資本投資の増大からなるばかりでなく、固定資本更新Ⅱ補填投資の増大をも同時に含んでいる。したがって固定資本の更新もまた循環の始点にかたまってしまうてあとは減ってゆくというのではなく、これまた循環の進行とともに増大し、繁栄局面（その前段階頃）に最大の集中をみせるのである。⁽¹⁶⁾」

こうして「恐慌は一大新投資の出発点」という命題の意味を考察された林氏は、更新投資が最大となるのは繁栄局面（その前段階頃）であるとされたわけである。なお、拡張投資に関しては「拡張投資は、固定資本の更新を機軸とした活況の開始とともに開始され、それ以後、循環の進行とともに増大し、とくに繁栄期には異常な規模でもり上がる。⁽¹⁷⁾」と考えられている。そして「この追加投資の盛行によって、活況から繁栄へ、繁栄から恐慌への局面推転の最強の軸線が形成される。」と論じられる。以上のことを林氏は事実Ⅱ資料に基づいて論証されてもいる。⁽¹⁸⁾

さて、それでは、このような固定資本の回転Ⅱ投資・更新、がいかなる意味で「周期的恐慌の一つの物質的基礎」をなすと考えられているのだろうか。これについての林氏の見解を二、三の引用によって示しておこう。

「投資が特定の局面に集中して行なわれるとすれば、この投資の集中した時期からかぞえて固定資本の平均寿命だけの年数が経過した時期に、固定資本の更新が最大量にたつする。この更新量の波のかたまりを基礎に拡張投資が大高揚を示す。やがて売り要因の反撃があらわれ、恐慌が爆発する。恐慌と不況期の若干の中断をおえて不況末期に更新がいっせいに開始され、やがてまた更新されるべき固定資本が大量となり、上昇が本式となり、これを基礎に拡張投

資が高揚する……というようにして、再び同一のことが、くりかえされる。このように、つねにある循環における固定資本更新と拡張とは次の循環における固定資本更新となって再出し、この更新固定資本プラス新たな拡張固定資本が、そのまた次の循環において更新の波をつくる、というふうに、固定資本の更新の集中こそ、循環と循環とを、それぞれの高揚局面においてつなぎとめる心棒のような役割を演じるのである。⁽¹⁹⁾

「循環の物質的基礎を右のように解釈するならば、次の問題として、循環と循環との時間的間隔もまたこの固定資本の平均更新期間によって規定されるということになるであろう。仮りに固定資本の寿命が一〇年だとすると、投資の集中した時期からかぞえて一〇年目にまた更新が集中することになる。こうして繁榮と繁榮の間隔が軸となって、循環と循環の間隔が、すなわち周期が形成されるわけである。循環の各局面は規則正しく交替してゆくから、繁榮と繁榮とをとろうと、恐慌と恐慌をとろうと、不況どうしをとろうと、また活況どうしをとろうと、間隔は同じ（一〇年）である。しかし、ある循環における投資全体（更新と追加投資の双方を含めて）の集中期、繁榮期と、次期循環中の更新の集中期、繁榮期との間隔こそ、周期の長さを表現すると解さなければならぬのである」⁽²⁰⁾

林氏の「周期的恐慌の一つの物質的基礎」に関する見解はほぼ右の引用にみられるとおりである。ごく簡単に（単純化して）いえば、〈固定資本の集中的投資——（一定期間後の）更新投資〉——これが周期を決定する基軸をなす契機に大方の論者とは異なつて、投資（更新）の集中期を活況から繁榮前期ごろと考えられているわけだが。

以上、ごく簡単にではあるが林氏の見解をみた。氏は固定資本の投資が集中的に行なわれることから、直ちに破綻、恐慌が求められるのではなく、むしろそれは逆に高揚を導くことになるという点に注目されて、従来のマルクス解釈に存する無理、不合理を突かれ、「一大新投資の出発点」ということの意味を納得のゆくように解釈されて（資料に

基ついてその点の分析もされた、右のような結論に到達されたわけである。こうして氏は一応合理的な説明をされたかに見える。しかし、恐慌が一大新投資の出発点をなすという点については——林氏も指摘されているように——むしろ不況（末）期集中説の方が一般的である。また、循環の周期とかかわる「周期的恐慌の一つの物質的基礎」について氏が、前期の投資が次期の循環のありようを規定するとするところについては有力な批判も存在するところである。だが、ここでのわれわれの課題は、林氏の説をも含めての諸説の検討そのものにあるのではなく、あくまで「周期的恐慌の一つの物質的基礎」を各論者がどう理解しているかをみるところにある。それゆえ、氏の見解の全面的な検討は省略し、次に、集中的更新を不況末期から好況期にみる見解の一例として富塚氏の見解をみてみよう。

〔不況末期——好況期更新説——富塚良三氏の場合〕

周知のように恐慌と産業循環の研究において大きな成果をあげられている富塚氏の見解の検討は、恐慌と産業循環を研究するさいに是非とも必要な作業であるといえようが、氏の見解についてはすでに大方の知るところであり、また多くの論者によって検討されているところでもあるから、ここでは、われわれの主課題である「周期的恐慌の一つの物質的基礎」に関して氏がどのように理解されておられるのかという点についてだけ見てゆくことにする。（もっとも、そのこととの関係で多少氏の恐慌論と循環論にたち入ることにならざるをえないだろうが）。

この「周期的恐慌の一つの物質的基礎」について氏は、『恐慌論研究』所収の後篇第五論文「拡張再生産過程と固定資本の回転」⁽²¹⁾においてかなりまとまった論述をされているので、大分前の論文ではあるが、この論文によって氏の見解をみてゆくことにしよう。

まず、富塚氏も林氏と同様、本項でわれわれが掲げておいたマルクスの叙述について、その理解しがたい点を率直に

語られている。すなわち「マルクスの叙述においては、何故に、また如何なる意味で、労働手段、『生産の骨格体系』の耐久年限によって規定される産業資本の——『平均して十年にわたるものと想定されうる』——『再生産期間』ないしは『生命循環』が、これまたほぼ十年を一週期とするところの、周期的恐慌の、恐慌を始点および終点とする産業循環の『一つの物質的基礎』をなすのかのその論拠が明らかでない」、と。そして、続けて、「むしろ、このマルクスの叙述においては『恐慌はつねに一大新投資の出発点をなす』という一定の事実認識にもとづいて固定資本の『独特な回転様式と恐慌の周期性についての問題提起がなされているものと解さるべきであるようにおもわれる。』」とのべられている。

確かに、マルクスの叙述から、何故産業資本の再生産期間ないしは生命循環が「周期的恐慌の一つの物質的基礎」をなすのかを理解することはかなり困難なことであろう。むしろ、その叙述は一見したところ不合理な叙述であるようにさえ思われる。しかし、だからといって富塚氏のいうように「一定の事実認識に基づいて……の問題提起」をしたものとするのは安易過ぎる「解決」の仕方であろう。そのこともまた証明されていないのだから。われわれはまず、マルクスが実際に記してある文章そのものに即してマルクスの真意を理解するよう試みるべきだろう。だが、今少し富塚氏の問題提起をみることにしよう。氏はこの「恐慌は一大新投資の出発点をなす」という命題について次のように語っている。

「……不況過程において強制され好況局面への転換をもたらす、この新たな労働手段の『社会的規模での』採用を伴う『一大新投資』の発足（シユムペーターのいわゆる『新企業の群的出現』が、因果的・不可避的に恐慌を帰結すべしとする論証はあたえられてはいない。また、固定資本の更新と新投下が周期的に回帰する各不況局面の終期毎に（不況過程の経済的諸条件に規定されて）集中的におこなわれるとすれば、その結果として、重要な産業部門における資本の回

転循環ないしは生命循環が不況・好況・ブーム・恐慌の産業循環とその周期において一致することは明らかである。だがそのことは前者が後者を規定しその意味で前者が後者の『物質的基礎』をなすということを意味してはいない。むしろその逆であろう。だとすれば『資本がその固定的構成部分によって縛りつけられているところの、多年にわたる連結的諸回転の循環』によって『周期的恐慌の一つの物質的基礎』が生ずるとするこの周知の命題の論拠は何か。⁽²⁴⁾

確かに、富塚氏の指摘されるように、恐慌が一大新投資(更新)を規定する、あるいは産業循環が回転循環を規定すると考える方が現実に合わせているように思われる。しかし、マルクスのいつていることはその逆なのだからマルクスのいわんとすることの真意を理解することは容易なことではない。だが、あくまでも、マルクスのいつているのは前者が後者の基礎をなすということである。一見、不合理であるかにみえるマルクスの叙述を富塚氏はどのように解決されたであろうか。氏はそのための一つの重要な手がかりを固定資本の独特な回転のうちに見い出して、それを、『発展した恐慌の可能性』の問題として考察されようとする。

「拡張再生産過程における固定資本の『磨損価値部分の貨幣形態での補填』＝償却基金積立と『現物補填』との対応関係の問題を『発展した恐慌の可能性』・『潜在的恐慌の内容規定の拡大』の一要因の解明として考察する。⁽²⁵⁾」

具体的には次のとおりである。富塚氏は「拡張再生産の進行途上、立体的に相関連する生産部門において、一定の技術的・経済的な関連性のもとに、一定の相互比率をもってそれぞれに一定量の固定資本が投下されるや、それらの固定資本、とりわけ労働手段生産部門のそれは、爾後の均衡的蓄積の進行速度を基本的に制約する、すなわち、その継続的な機能の発揮は、年々一定の蓄積率が保持され、かくして年々の蓄積額は一定の等比数列をもって加速度的に増大してゆくべきことを要請する。⁽²⁶⁾」と、周知の氏の均衡蓄積率(軌道)についてのべられた後、拡大再生産においては「固定資本の新投下額 ΔF が逐年増加する……場合における現物補填 f を超える償却基金積立 d の価値額の、固定資本の

平均耐久年限を一週期とする通増運動を、拡張再生産進行の随伴現象として認めなければならないことになる」と論じ、続けて「この固定資本の現物補填の価値額 f を超える償却基金積立 d の額は……それに対応するだけの労働手段の（潜在的形態での）過剰生産を規定する。その顕在化がなんらかの方法によって、絶えずその翌年度へと繰り延べられてゆくとしても、それはまた却ってそれ自体不均衡要因の堆積を意味しなければならない。もし仮りにこの推論にして誤りなければ、われわれは、均衡の前提においてもなおかつ、拡張再生産の進行は、その内部にかかる不均衡要因を不可避的に累増・堆積せしめてゆくのだと論定しなければならないであろう。」とされる。そして、「固定資本の再生産期間によって規定される資本の『回転循環』のうちに周期的恐慌の『一つの物質的基礎』を見出そうとしたマルクスの着想は、或いはこうした推論と無関係でないのではなからうか。」と結論づけられるのである。⁽²⁸⁾

確かに氏のいわれるように、拡大再生産において固定資本の回転を考慮に入れた場合の均衡条件（蓄積率）がどうなるかは重要な問題であろう。また、過剰が顕在化しないでくりのべられていった場合に不均衡要因が累積してゆくというのも重要な指摘であろう。そしておそらく、こういう問題が産業循環論の一重要論点をなすだろうということもそのとおりであろう。しかし、だからといって氏のいわれるように、マルクスの「周期的恐慌の一つの物質的基礎」についての命題がそれらのことだということにはならないだろう。だが、今少し先をみよう。

富塚氏は右にのべたことを基準に次のように論を進められる。「不況過程から好況過程への転換期に主導的な産業諸部門の固定資本の更新が集中的におこなわれた場合に」どのようなことが生じるか。これについての富塚氏の見解は産業循環論の説明にもなっているから、少し長くなるが、また内容的にこれまでのべたことと多少重複するところもあるが、引用しておこう。

「不況過程から好況過程への転換期に主要な産業諸部門の固定資本更新が集中的に行われるや、その期間 $\sim V R$

となり、この需要に応ずる労働手段生産部門の拡張を、従ってまたこの部門への固定資本の新投下を生ぜしめる。それと同時に他方、労働手段生産部門の拡張はその生産部門のための原料生産部門の拡張を、従ってまたこの部門への固定資本の新投下を呼びおこす。このIaおよびIb両部門における固定資本の新投下はさらにIa部門の拡張を惹起する。なお、かような第I部門の拡張は雇用と消費需要の増大を通じて第II部門の拡張を誘発し、第II部門の拡張はさらにねかえって第I部門の拡張を誘発してゆく。かくして投資需要が一巡して、各産業部門に一定の技術的・経済的な関連性をもってそれぞれに固定資本の一定量が投下され設置されるや、それらの固定資本、とりわけ規定的な意味をもつ労働手段生産部門のそれは、爾後の蓄積の進行速度を規定する。すなわち、爾後の一定の加速度をもって蓄積が進行しなければ、労働手段生産部門は過剰生産か或いは固定設備の遊休を余儀なくされる。……投資が投資を誘発してゆく好況過程においては、かような加速度的蓄積の進行も可能であろう……が、しかしそれには一定の限界がある。とりわけその限界は、有効需要増大の資本制的限度を画する資本の『絶対的過剰蓄積』なる限界点によってあたえられている。蓄積速度の急激な鈍化は避けえない。蓄積速度が急激に鈍化するや、先ず労働手段生産部門が、次いでそのための原料生産部門が過剰生産となり、この第I部門における生産・雇用減退による消費需要縮小によって過剰生産はさらに第II部門へと波及し、それはまた逆に第I部門へとねかえってゆき、かくして全般的過剰生産恐慌を現出するにいたるのである。蓄積速度の減退はとりわけ労働手段生産部門に過剰生産をもたらす。かくして、固定資本の独特な回転様式とそれによって規定される固定資本投資の特殊性は、主要産業諸部門の固定資本更新が不況過程から好況過程への転換期に、集中的におこなわれることと相俟って、次期の恐慌を規定する一要因として作用する。この意味で、固定資本の『生命循環』は、産業循環の、周期的恐慌の、『一つの物質的基礎』をなすのではなからうか。⁽²⁹⁾

以上、少し長くなったが富塚氏の見解をみた。林氏が好況期——繁栄期に集中的更新をみるのに対して——富塚氏

は不況末——好況期にそれをみている点で、すなわち、どの時期（局面）において集中的更新がなされるかについて、両者の意見は異なっている。また、両者の恐慌論——その体系もかなり異なっている。だが、それにもかかわらず、集中的更新が以後の過程を（高揚へ）推し進めてゆくとするそのとらえ方において、そして、その点に『周期的恐慌の一つの物質的基礎』をみる点において両者の見解には一つの共通点が存しているといえよう。しかし、マルクスのいう「周期的恐慌の一つの物質的基礎」はそのような意味でいわれているとみなされるべきであろうか。マルクスの叙述に即しての厳密な検討が必要であらう。

「富塚説への補足——井村喜代子氏・玉垣良典氏の見解」

これまで、固定資本の独特な回転の仕方——それと関連する回転循環——を一つの重要な理論構成の柱としつつ産業循環論を展開されている二つの代表的な見解、すなわち、不況末期——好況期に更新投資の集中をみる見解（富塚氏）と好況末期——繁栄期にそれをみる見解（林氏）の概略をみた。両見解とも——みたようにその理論構成はかなり異なるわけだが——「周期的恐慌の一つの物質的基礎」を固定資本の独特な回転の仕方に、すなわち、ある時期に局面で固定資本が大量に更新されること（そして、その時点から一定の期間後また更新の集中が生じる）、そのことが循環を高揚局面へと引き上げてゆくこと、そして以後の過程を（恐慌まで）推進する一つの重要な契機であること、そうしたことのうちにみているという点では共通したとらえ方をしているといえることができる。本稿でのわれわれの目的は、各論者の恐慌論や産業循環論を——その当否を——検討すること、そのことにあるのではなく、全般的「周期的恐慌の一つの物質的基礎」とは何かということの理解を各論者がどうされているのかを考察することにあるのだから、これ以上他の見解をみることはもはや無用のことともいえようが、念のため、なお、少し、われわれの課題に直接かわ

る点のみを簡単にみておこう。

井村喜代子氏の見解

恐慌分析は「あくまでも産業循環過程の分析でなければならない⁽³⁰⁾」という観点に立ち、それゆえに、林氏や富塚氏の研究を評価し、とりわけ、富塚氏の均衡蓄積軌道概念の設定や表式への固定資本の回転の問題を導入したことに對して大きな評価を与えつつも、生産力等一定のもとで唯一の均衡蓄積があるとする富塚氏の均衡蓄積率（軌道）のマジッドなとらえ方には反對し「生産力一定・有機的構成等一定のもとでも、拡大率の異なる『均等的拡大再生産』が無数に存在し、 α の高さによって、部門構成が相異なる」ことを論証し、続けて『均等的拡大再生産』では、『均衡』のための部門構成は、有機的構成等と、拡大率 α とに、照応したものとならねばならない⁽³¹⁾とする井村氏は生産と消費の矛盾を理論構成の一基軸において自己の恐慌論Ⅱ産業循環論を構築されたわけだが、その井村氏が「周期的恐慌の一つの物質的基礎」をどのように理解されているかを氏の著作から二、三の引用をすることによって示しておこう。次のとおりである。

「産業循環の周期的運動は、周期的な固定資本更新の集中的展開による回復の出現をもって始動し、その基礎上で展開する新投資の主導による好況の発展Ⅱ〈生産と消費の矛盾〉の累積・成熟、恐慌の爆発Ⅱ〈矛盾〉の爆発とその一時的解決によって沈黙状態となることをもって終り、またつぎの新しい更新の集中的展開による回復を通じてつぎの新しい循環運動がはじめられていく。したがって、この産業循環の周期は、固定資本更新の集中的展開の周期によって規定されているといえる⁽³²⁾。」

「固定資本が投下されてから更新されるまでの期間Ⅱ『回転循環 Umschlagsszyklus』の長さが同一かまたは類似している固定資本の総量がかなりの量をしめているとすると、これらの長さが、ある回復Ⅱ産業循環の始点からつぎの回

復「産業循環の始点までの長さを規定し、それを通じて産業循環の周期を規制する一つの重要な作用をはたす」⁽³³⁾

みられるように、井村氏にあっても、固定資本の集中的更新と回転循環の理解の仕方、したがって「周期的恐慌の一つの物質的基礎」についての理解の仕方は、林氏や富塚氏と共通しているといつてよからう。ただ氏の場合の特徴は次のような限定がつけられているところにある。すなわち、「産業循環の周期が『回転循環』によって規定されるということは……ある特定の生産部門がつねに各循環の回復をうみだしていき、したがってこの部門の『回転循環』の長さとは循環の周期が一致するというような厳格な、硬直的な意味ではない。『回転循環』の長さが類似した固定資本がかなりの量存在していることを基礎として、不況の諸条件の作用のもとで、更新投資の集中的展開が相前後して生じ、一連の更新投資が持続していくことによって、回復・好況の出現がもたらされていくというのである。それゆえ、『回転循環』による規制といつても、それは基底的な規制の作用を意味するにとどまる」⁽³⁴⁾。このような限定がついているとはいえ、井村氏の理解の仕方は林氏、富塚氏と共通しているといえる。

玉垣良典氏の場合

玉垣氏は、富塚氏の見解を「商品過剰説と資本過剰説の独自の媒介の試みとして」評価しつつも「富塚説では『資本一般』の枠内で……恐慌の『構造的必然性』……をこえたいわば循環性恐慌の『必然性』を原理的に論定しようとする方法論にしばられて『実現恐慌』の基本命題と『資本の絶対的過剰生産』の命題が、論理次元の差異を正當に顧慮されることなく直接的に接合するところに無理が生じ、これが氏の所説の理解を困難にする二元的説明を持ちこむ結果となり、結局のところ抽象的な『恐慌の必然性』論から産業循環論への上向展開という、戦後恐慌論研究の動向にそった発展の道程におけるそれ自体一步前進であるとともに、それ以上の展開のためには取り除かねばならない中間的折衷的解決として位置づけられねばならない」⁽³⁵⁾と評価される。そして、富塚氏の均衡蓄積軌道概念の提起を評価

しつつも、そのあまりにリジッドなとり扱いを批判された井村喜代子氏の見解については——それについてわれわれは今みたところであるが——（置塩信雄氏のそれとともに）「これらの論者の批判は『均衡蓄積軌道』の概念の拡充として意義をもつが、ここでの理論の本筋にはあまり関係がない。」とみなされる。というのは、「この概念はそれからの乖離の、すなわち不均衡検出の基準として提起されたのであり、実質賃金率や蓄積率についての想定を変更すれば『均衡蓄積軌道』は（所与の生産力水準の下で）異なりうるということとは、景気循環の経過においてそれらの比率を任意に変更して『均衡蓄積軌道』の転位が可能だと主張するものではないからである。」⁽³⁶⁾とのべている。他方、商品過剰説の立場からの——井村氏の見解もその一つといえようが——富塚批判に対しては（二瓶敏氏等の見解を念頭におきつつ）、『資本一般』次元の消費制限命題の『競争と信用』次元への無媒介的適用によって、商品過剰説の論理を循環的蓄積論にそのまま延長してゆき、結果として商品過剰説がしばしば陥りがちな過少消費説的弱点をいっそう露呈する結果に終る⁽³⁷⁾』と批判される。

こうして、氏は、富塚理論を評価し、それを克服されようとしていくわけだが、その産業循環論の展開方法は次のようであるべきだとされている。

「積極的な展開の方向は、労賃騰貴の要因だけでなく、むしろそれに先立って信用の拡張限界を明示的に論理に導入し、過剰蓄積過程の再生産論的分析を信用の論理との内的機構的連関を、循環的蓄積論構築の方向において説明することである⁽³⁸⁾。あるいは「再生産論あるいは有効需要の構造的分析和信用論を、『競争と信用』の次元において、つまり循環的蓄積論の論理次元において理論的媒介を試みること」、「そのための方法論を確立すること」⁽³⁹⁾である。——これが玉垣氏の観点である。

玉垣氏は、右のような観点に立って理論を展開されていくわけだが、ここでは、そのような観点に立つ氏がわれわ

れの本稿での課題であるマルクスの回轉循環とかかわる「周期的恐慌の一つの物質的基礎」という命題をどのように理解されているかという点に関してだけ——例のとおり——みておこう。ここでも氏の著作からわれわれの問題について言及している個所を引用しておこう。

『固定資本』は一方で生産力水準の指示器であり、生産能力の骨格構造をなす点で、蓄積軌道設定軸たる地位を占めるものであるが、他方でその独特の回轉様式にもとづき、需要造出効果の面で特有の加速効果を發揮し、いわゆる加速度機構の中核をなす点でも變動の鍵を握る要因であることに注意すべきである。いま仮に投下固定資本と流動不變資本の価値額の比率が $F:R=2:1$ とし、固定資本の耐用年数一〇年とすれば毎年 $F/10$ が磨損し生産物へ価値移転され、再生産フローでは固定資本と流動不變資本の補填需要の価値比率は $S:R=1:5$ である。ところが蓄積フローでの両者の価値比率においては事情は異なる。固定資本はその全価値が一括的に投下され長期間の使用を通じて漸次的に生産物に価値を移転し減価償却基金として回収され積立られる。(投資)需要効果の一括的大量性と供給効果の漸次性および連続性という両効果の非対照性、この固定資本の回轉様式の独自性によって、蓄積部分の両者の価値比率は $wF:wR=2:1$ であり、更新フローの価値比率ではなく、原投下資本の価値比率に従わなければならない。つまり $K\%$ の需要(生産)の拡大に対応するためには従来の更新フローの $K\%$ の増加ではなくストック F の $K\%$ の増加をもって応じなければならないから、一挙に大量の固定資本需要が発生することになる。われわれの設例では蓄積においては実に流動不變資本投資の二倍の固定資本投資需要が発生する。景気変動において固定投資の変動に一つの基軸的役割を振り当てられる理由は以上により理解されよう。この重要性にもっとも早く着目したのがマルクスであり、固定資本の生命循環に規定される資本の『回轉循環』に『周期的恐慌の物質的な基礎』を発見したことはつとに有名である。⁽⁴⁰⁾」

みられるように、玉垣氏にあっても、固定資本の大量の投資（——更新投資）、それがもたらす社会的需要の増大、こうした点に「周期的恐慌の一つの物質的基礎」をみているといつてよいであろう。

以上、「周期的恐慌の一つの物質的基礎」に関して代表的な見解ではどのように理解されているかをみてきた。先にも述べたところであるが、各論者により恐慌と産業循環の展開の仕方は異なっているにもかかわらず、ことこの、「周期的恐慌の一つの物質的基礎」の理解に関する限りでは多くの見解はかなり共通したものであったということができる。固定資本の大量の投資（そして更新投資の集中）、これが大きな需要要因となり、循環の過程を上昇へと押し進めることに注目しているわけである。大量の更新投資（その集中）が、社会的需要を増大させ、景気を上昇させていく点を理論構成の大きな柱にしているといつてよからう——固定資本はその独特な回転の仕方ゆえに一定の周期で、更新されることになる——。そして、この点に「周期的恐慌の一つの物質的基礎」をみているわけである。だが、マルクスが固定資本に規定された回転循環のうちに「周期的恐慌の一つの物質的基礎」を求めたのは、このような意味においてであったのか。マルクスの叙述に即してみる限りではとうていそのように理解することはできないといわねばならない。そこで、マルクス自身の見解⁴¹に叙述を次に検討することにしよう。

三 「周期的恐慌の一つの物質的基礎」についてのマルクスの叙述

周知のようにマルクスは「機械設備が更新される平均期間」に「大工業が設立されて以来産業の運動がとおる多年にわたる循環を説明するうえでの一つの重要な契機」をみとめた。⁴¹そして彼は、エンゲルスに対して「君たちの工場では、どのくらいの期間で機械設備を更新するか」を問い、「機械の本体に別の性質を与える。つまり多少ともそれを

更新するには一〇年から一二年で十分だ⁽⁴²⁾」という返事Ⅱ回答を得たわけだが、この返事に十分な満足を与えた彼は次のように感謝の言葉をのべている。

「機械についての説明どうもありがとう。一三年という年数は、それが必要なかぎりでは、理論に一致している。というのは、この年数は、工業再生産の一期間の一単位を示しており、この単位期間は、大きな恐慌が繰り返される周期と多かれ少なかれ一致しているからだ。もちろん、恐慌の経過は、その再生産期間から見て、なおまったく別の諸契機によって規定されるのだが。僕にとつて重要なのは、大工業の直接的物質的諸前提のなかに循環を規定する一つの契機を見いだす、ということだ。⁽⁴³⁾」

マルクスはこのように「大工業の直接的物質的諸前提のなかに循環を規定する一つの契機を見いだす」ことが重要だとしているわけだが、一体どのような意味で、大工業の直接的物質的諸前提のなかに循環を規定する一つの契機を見いだしたのだろうか。ここでいう循環を規定する一つの契機というのは、前の文章との関係からみて、「周期的恐慌の一つの物質的基礎」と同じような意味と理解してよからうが、これについてのわが国における代表的な見解の二、三については今までみてきたところである。本項ではマルクス自身の叙述に即してこの点をみてゆくことにしよう。われわれが考察―検討すべきマルクスの叙述は先に二の初めにかかげた『資本論』二部二篇九章からの引用が主たるものであるが、その他にも、『経済学批判要綱』や『資本論』二部一稿の中に検討すべき叙述が存するので、それらもあわせてみておこう。

『経済学批判要綱』の叙述⁽⁴⁴⁾

「……労働を測るための時間単位が一日であったように、資本の復帰を測るための総時間は一年であった。われわれが「このように」した理由は、第一に、一年は多かれ少なかれ、工業で消費される大部分の植物性原料の再生産に

とて、自然的な再生産時間ないしは生産局面の継続時間だからである。だから流動資本の回転は、総時間としての一年のあいだの回転の回数によって規定されたのである。じっさい流動資本はその再生産を各回転の終りに開始するのであり、また、一年間の回転数は総価値には影響を及ぼすにしても、それぞれの回転のあいだに流動資本が体験する運命はたしかに流動資本が新たに再生産を開始する場合の諸条件にたいして規定的であるようにみえながら、それぞれの回転は、それ自体としては流動資本の一つの完全な生活行為なのである。資本が貨幣に再転化されれば、資本はたとえば最初の生活諸条件とは別の生活諸条件に転化され、ある生産部門から他の生産部門に投じられうる——その結果、再生産は素材的にみれば同一の形態では反復されないことになる——のである。

固定資本がはいってくると、以上のことは変わるのであって、資本の回転時間も、その回数を測るための単位である一年も、もはや資本の運動にとつての時間単位としては現われない。いまやむしろこの単位は、固定資本にとって必要な再生産時間によって、したがってまた、固定資本が価値として流通にはいりこみ、ついでその価値総体において流通から復帰するのに要するその総流通時間によって規定されている。流動資本の再生産は、この時間全体を通じて、素材的にもまた同一の形態で行なわれなければならない、そして流動資本の必要な回転の回数、すなわち当初の資本の再生産に必要な回転の回数は、長短さまざまな一連の年数にわたり配分されるのである。したがって資本の諸回転を測るための単位として、より長期の総期間が指定されているのであって、いまや諸回転の反復はこの単位と外的な関連ではなく、必然的な関連をもっているのである。だから、バベジによればイギリスにおける機械類の平均的再生産は五年なのであるが、実際の再生産は、もしかすると一〇年かもしれない。固定資本が大規模に発展して以来、一〇年前後の期間で工業が通過するところの循環が、このようにして規定された資本の総再生産局面と関連しているということには、まったく疑問の余地がないのである。われわれは、また別のものもろの規定的根拠をも見いだすであらう。

う。しかしこれはその一つなのである。以前にも、収穫に豊凶があるように（農業）、工業にとっての好況不況は存在した。しかし、特徴的な諸期間、諸時期にわかれた多年にわたる産業循環は、大工業のものである。」

みられるように、ここでは、〈資本の復帰を測る単位（期間）〉が問題とされているわけだが、この単位（期間）は固定資本が入ってくるようになると長期になることが語られている。そのようなことについてのべる中で機械類の再生産に関するバベジの見解を批判しているわけだが——五年ではなく一〇年前後だろうと——、その際にあげている理由が、われわれが考察Ⅱ検討の対象としていているところの論点である。すなわち「固定資本が大規模に発展して以来、一〇年前後の期間で工業が通過するところの循環が、このようにして規定された資本の総再生産局面と関連しているということには、まったく疑問の余地がない」という一文である。マルクスはバベジを批判するにあたって、「このようにして規定された総再生産局面」と「一〇年前後の期間で工業が通過するところの循環が」、「関連しているということには、まったく疑問の余地がない」がゆえに、現実（経験上の事実として）循環が一〇年前後であるということ、機械類（固定資本）の再生産（更新期間）が五年ではなく一〇年前後であるということの証拠になるのだとのべているわけであろう。だが、マルクスは、「このように規定された資本の総再生産局面」と「一〇年前後の循環」が、なぜ、どのように、関連しているのか、そのことについては何ものべていない。しかし、われわれにとっては、なぜ、どういう意味で機械類の再生産と一〇年前後の循環が関連しているのかということこそが問題である。ここでは、両者が関連していることの指摘がなされていることをさしあたり確認しておくにとどめておこう。そしてまた、ここで引用した最後の部分で「以前にも、収穫に豊凶があるように（農業）、工業にとっての好況不況は存在した。しかし、特徴的な諸期間、諸時期にわかれた多年にわたる産業循環は、大工業のものである。」とのべていることを心にとどめておこう。ここでは、恐慌は不規則に発生するのではなく、産業循環の一環（一局）として発生Ⅱ存在する、

そのような恐慌を含む長期にわたる産業循環が機械制大工業にとって特徴的なものであることが語られている点を心にとめておこう。

以上、なぜ、どのような意味で、機械類Ⅱ固定資本の再生産(期間)と(産業)循環(および周期的恐慌)が関連しているのかという肝心の点については説明が与えられていないが、しかし、ここで問題となる循環と恐慌が大工業のもとのそれであることなど、いくつかの重要な問題がのべられている。さしあたり以上を確認して、次に『資本論』第一稿の中で「周期的恐慌の一つの物質的基礎」についてふれた個所をみることにしよう。

『資本論』Ⅱ部「第一稿」の叙述⁽⁴⁵⁾

ここでも最初に該当部分を引用しておく。

「ある個別の資本を、たとえば、綿工業にたずさわっている資本を、そこではまた固定資本が大きな空間を占め、その価値流通がたとえば一二年にも達しており、したがって、この資本家の流動資本もまたこの事業部門に一二年間拘束されているという資本を観察すれば、この資本は、資本が三か月、等々の中には、引きあげられうるような事業の場合にくらべれば、より多く不運のまゑにさらされていることがわかる。消費する諸原材料の価格変動、市場の状態や貨幣市場、等々の変化、競争によってひき起こされる生産物「価格」の下落あるいは上昇、労働の生産力の変化、等々、これらが交互に入れ替わり、相殺し、同時に重なって起こる。こうした観点からさらに、固定資本によって条件づけられている産業の回転循環がどのようにしていまや恐慌の周期性の物質的基礎を形成するのか、という「論点」を展開することができる。」

みられるようにここでは産業の回転循環が「恐慌の周期性の物質的基礎を形成する」のだということがはっきりとべられている。しかし、どのようなわけでそうなのかということまでは詳しくは説明されていない。それを理解す

る手がかりをなすものが「こうした観点から……展開することができるといふ叙述であろう。したがって、ここで穿さくすべきは、まずなによりも「こうした観点」とは、どのような観点なのか、ということである。

ところで、この引用文に先立つ個所には次のような叙述が存在する。

「固定資本は別個の範囲『Umfang』を占めており、またこうした別個の図体『Umfang』が資本主義的生産の発展と歩調をそろえてすすみ、それは資本主義的生産の産物であり、さまざまな産業部門に投下された各個別の資本のいわば生活期間を延長し、ひいては、さまざまな産業部門における労働と再生産過程との連続性を生産様式自身によって命じられた一つの物質的な必然性にする。⁽⁴⁶⁾」

ここでは「資本の生活期間の延長」と「労働と再生産過程の連続性」について語られている。機械等固定資本の存在はそれを必然にすることがのべられている。われわれがここで読みとるべきは、実は、こうした「資本の生活期間の延長」と「労働と再生産過程の連続性」こそは、産業循環の一重要契機——一つの物質的基礎だという点である。すなわち、資本が短期に、簡単にはそれが投下された部面から引き上げられないということこそ、その上で産業の運動が展開される条件だからである。ここでのマルクスの叙述の裏にかくされているのはこのことであろう。右の叙述をこのように読みとる時われわれが先に引用した叙述の意味も明確なものとなる。すなわち、長期にわたって——例えば一二年間——一定の事業部門に拘束されている資本は、短期間で引きあげられる資本に比べてより多く不運の前にさらされるとして、その不運の内容が種々あげられているわけだが、そして、それに続いて「こうした観点から」固定資本によって条件づけられている産業の回転循環が「どのようにして」(傍点——沢田)恐慌の周期性の物質的基礎を形成するのかという問題を展開できるとしているわけだが、ここでいう不運の内容——資本が遭遇するさまざまな出来ごとこそ、産業循環の過程で生じることには他ならないとすれば、長期にわたる過程——回転循環——産業の生命循環——

こそ、その上で産業の運動Ⅱ産業循環が展開される場に他ならないことになる。ここ「第一稿」でマルクスが「恐慌の周期性の物質的基礎」としているのは大方の論者の見解とは異なり、まさに、資本を特定の部に長期にわたって拘束し続けることによって生ずることだととらえるべきだろう。⁽⁴⁷⁾ その下で産業循環の過程が次々と経過していくがゆえに恐慌が周期的に発生するのだとマルクスは考えていたとみるべきであろう。資本が長期にわたって——例えば一二年間——特定の産業部に留まっている——留まらざるをえない——ということが強調されているのである。「この点、先の『要綱』からの引用文の場合でも長期にわたる循環は機械制大工業のものである、とされている点が想起すべきである。長期にわたる循環が、収穫の好・凶と類似の工業の好、不況とは異なる恐慌Ⅱ周期的な循環性恐慌の基礎をなしているという認識がマルクスにあったといえよう。」

以上の点は先にかかげておいた現行『資本論』Ⅱ部Ⅱ篇九章からの引用においてはいっそう明白であるように思われる。みてみよう。

現行『資本論』Ⅱ部Ⅱ篇九章——回轉循環——の検討

回轉循環についてのべられている叙述の中でわれわれの課題との関係からいって特に注目しなければならないのは、次の個所である。前に掲げたところであるがその一部を今一度掲げておこう。

「資本がその固定的成分によって縛りつけられている、連結する諸回轉から成っていて多年にわたるこのような循環によって、周期的な恐慌の一つの物質的な基礎が生じるのであって、この循環のなかで事業は、弛緩、中位の活気、突進、恐慌、という継起する諸時期を通るのである。」

みられるように、「周期的な恐慌の一つの物質的基礎」が生じるのは、「多年にわたる」循環（Ⅱ回轉循環）によって

である。この点、先に第一稿の検討のさいにみたのと同様である。すなわち、資本が長期にわたってある事業部門に縛りつけられているということによってである。また、マルクスは「この循環のなかで……」とのべているわけだが、ここでは、はっきり、弛緩から中位の活気、突進、恐慌という産業循環の諸局面、その推移が、この循環、すなわち、回転循環の中で行われているとのべられているのであって、そのことに関しては、それこそ、「疑問の余地はない」。

マルクスは「第一稿」の場合と同様、ここでも「周期的恐慌の一つの物質的基礎」ということを明らかに（固定資本の存在に規定された回転循環のために）資本が長期にわたってある特定の事業部門にしばりつけられているということとして——そしてそれによる長期にわたる産業の生命循環——のべているわけである。このように長期間に、いいかえれば、資本の回転循環のなかで、事業は産業循環の諸局面を経過するのだと語られているわけである。旧来、この点、何故に理解されなかったのかは不思議なことといふべきだろう。

四 おわりに

これまで、われわれは「周期的恐慌の一つの物質的基礎」とは何を意味するのかということについて検討してきた。そして、わが国における多くの見解は、マルクスが指摘していることは明らかに異なる理解をしているということ、一応、明らかになった。すなわち、マルクスの文言についてみるかぎり「周期的恐慌の一つの物質的基礎」というのは、端的にいえば、資本が長期にわたって特定の事業部門に拘束されていること、（したがって同一形態の生産を継続しなければならないということ）をさしているのだと理解される。固定資本の存在のために、その価値移転Ⅱ減価償却がおわる前にそれが投下されている場から資本を引きあげることとは大きな損失となること、そのため、投下Ⅱ設置された機械等の固定資本の存在に規定されて長期にわたる生産の継続Ⅱ反復（つまりは回転循環）が資本にとって必要と

なるわけだが、マルクスはまさにそのことに周期的恐慌の——あるいは「恐慌の周期性の一つの物質的基礎」をみたわけである。その点を条件Ⅱ基礎として産業の運動が展開Ⅱ継続されてゆくからである。すなわち、資本は一定期間ひき上げられないからである。産業循環の諸局面——弛緩から恐慌に至るそれ——の展開Ⅱ継続はこのことの上で可能となるからである。マルクスの叙述に即して理解する限り「周期的恐慌の一つの物質的基礎」ということの意味はそれ以外ではあり得ないように思われる。決して大量の機械等固定資本の投資——そして一定期間後の更新——によって大きな需要が生じ、それが「景気」を上昇させ（その中で矛盾が累積し）恐慌へと至らせること、しかもそれが一定期間をおいてくり返されることのうちに「周期的恐慌の一つの物質的基礎」を求めているわけではない。生産Ⅱ過程の継続性こそ前局面の「結果」が次の局面の「前提」となって展開する——それが産業循環の形を形づくる——、そして、その帰結として恐慌が周期的に発生する。このように理解すべきであろう。この点からすれば、これまでの多くの論者の理解は、あまりにもいわゆる「近代経済学的」解釈になっていたといわなければならないだろう。われわれの前稿もそうであり、この点は訂正しなければならない。

(1) 恐慌と産業循環の歴史についてはさしあたり、エリ・ア・メンデルソン著、飯田實一、山本正美、平館利雄、平田重明訳『恐慌の理論と歴史』(J.L.A. Mendelson, Теория и История Экономических Кризисов и Паник)、『青木書店』、一九六七年、参照。

(2) K・マルクス『資本論草稿集』1 (1857—58年の経済学草稿1)、邦訳三二一頁 (Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe — 以下 ME GA と略称) 2 Abteilung: „Das Kapital“ und Vorarbeiten, Band 1. Karl Marx Ökonomische Manuskripte 1857/58. Teil 1. Dietz Verlag Berlin, 1976, S.187).

(3) たとえば、次のとおりである。「一定の点をこえると、生産諸力の発展は資本にとって制限となる。……尖锐な諸矛盾、恐慌、痙攣においてこそ、社会の豊かな発展にとっては、その従来の生産諸関係が、ますます適合しなくなったことが示される。資本にとって外的な諸関係を通じてでなく、資本の自己維持の条件としての資本の暴力的な破壊は、去って社会的生産のより高い段階に席をゆずれ(……)という資本に

に対する忠告(……)のもっとも的確な形態である」K. Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857—1858, Dietz Verlag Berlin, 1953. 以下 Grundrisse と略す。S. 635—636. 高木孝一郎監訳『経済学批判要綱』Ⅳ、大月書店、一九六二年、七〇—七二頁。

- (4) このうち、もっともまとまった叙述がなされているのは、「二三冊のノート中のいわゆる『剰余価値学説史』の「リカード著論」のところにおいてである。MEGA 2A Abteilung Band 3, Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskripte 1861—63) Teil 3. 邦訳『草稿集』6 所収。
- (5) こうした観点からの成果としては、わが国の研究に限っても、山田盛太郎『再生産過程表式分析序論』——『山田盛太郎著作集第一巻』所収、岩波書店、一九八三年。なおこの『再生産過程表式分析序論』の出版されたのは、もともとは一九三二年。——における簡潔な恐慌に関する記述以来、多くの労作の存するところである。(代表的なものとしては、宇高基輔、南克巳『資本論』における恐慌理論の基本構成『土地制度史学』四号、一九五九年、富塚良三『恐慌論研究』前編「恐慌論の基本構成」未来社、一九六二年。しかし、こうした観点からの研究については「この立場は、マルクスの経済学体系と恐慌論体系とが何らかの意味で共存しうるということを自明あるいは暗黙の前提とするものである」という批判も存するところである。(高須賀義博『マルクスの競争・恐慌観』岩波書店、一九八五年、一四〇頁)。この点、どのように考えるべきかは一つの大きな問題であるが、本稿ではこの点については立ち入らない。

- (6) 再近の産業循環に関する成果のうち、代表的なものとしては、次の著作をあげることができよう。

井村喜代子、『資本論』の理論的展開、有斐閣、一九八四年のうち「産業循環」についてのべていくつかの章。逢坂充、『再生産と競争の理論』、梓出版社、一九八四年。玉垣良典、『景気循環の機構分析』、岩波書店、一九八五年。高須賀義博、前掲『マルクスの競争・恐慌観』。

なお、右のような産業循環論——産業循環のメカニズムの解明を志向する研究に対して、そうした傾向をとらない研究の最近における労作として、小沢光利、『増補恐慌論史序説』、梓出版社、一九八四年。

- (7) マルクスの産業循環に関する叙述については、久留間敏造編、『マルクス経済学レキシコン』の「9 恐慌Ⅳ」、大月書店、一九七六、参照
- (8) K・マルクス、『資本論』(Das Kapital, Kritik der Politischen Ökonomie) からの引用は、『マルクス・エンゲルス全集』(Marx/Engels Werke, Bd. 23—25, Dietz Verlag, Berlin 1962—1964) 邦訳、大月書店によった。なお『マルクス・エンゲルス全集』からの引用は、単に『全集』と略記することにする。前掲、久留間『レキシコン』の訳文も参照させていただいた(そこでの訳文を利用させていただく場合もある)。

- (9) 林直道、『恐慌の基礎理論』、大月書店、一九七六年。

- (10) 同、二〇二頁。

- (11) 同、二〇三頁。

(12) 同、二〇三頁

(13) エルスナーの見解は、およそ、次のように要約することができよう。すなわち、彼は「循環の開始期」に固定資本が投資され、それから一定期間（一〇年）の後「景気の絶頂」でそのいっせいの更新期がくるとするわけだが、そのさい更新がスムーズに行われるためには大量の貨幣が必要となるとする。しかし、そのさいに必要な貨幣は十分には存在しないと考える。その理由は、生産手段の価格騰貴のために必要な貨幣が増大したことや償却金が「金庫のなかに」貯えられたままであるのではなく追加の固定資本として使われていたり、他人に利用されているためであるが、彼はこうした貨幣不足こそが、恐慌を必然にするのだとみなすのである。

このエルスナーの見解にはいくつかの誤まりが存するが、林氏は、固定資本の更新に関していえば「循環の両端、始点・終点に固定資本更新の集中を設定している点でまず事実には合わない」と批判されている。（林、同、一四九頁）。

エルスナーの見解については、Fred Oelsner, "Die Wirtschaftskrisen", Erster Band: Die Krisen im Vormonopolistischen Kapitalismus, Dietz Verlag, Berlin, 1953. 邦訳『経済恐慌』（恐慌論研究会訳）大月書店、一九五五年のうち、とりわけ、第一篇、第三章「恐慌の必然性」の九、参照。

(14) 林、前掲書、二〇六頁。

(15) 同、二〇六—二〇七頁。

(16) 同、二〇七頁。

(17) 同、二二八頁。

(18) ここで主として使用されている資料はオスロ大学経済学研究所アイナルセンの行なったノルウェー海運業にかんする調査研究『再投資循環とノルウェー海運業におけるその表現』である。（Johan Einarsen, Reinvestment Cycles and their Manifestation in the Norwegian Shipping Industry, Oslo, 1938）。

なお、このアイナルセンの資料については大分前のことになるが、南克巳氏も利用されている。南克巳「再生産過程の周期的構造」、神奈川大学『商経法論叢』八巻三号。

(19) 林、前掲書、二三五頁。

なお、林氏のこのような理論展開は基本的に氏の原著、『景気循環の研究』のそれを引きついでいるといつてよいが、この原著での論理に關しては二瓶敏氏が、そうした論法は「必然的に循環論法に陥らざるをえない」と批判されている。（二瓶敏、『過剰蓄積の内的構造』と過剰生産（上）、広島大学『工業経営』、第一四巻二号）。

(20) 林、前掲書、二三六頁。

(21) 富塚良三『恐慌論研究』は、注（5）で示したように一九六二年であるが（なお、増補版は一九七五年）、この後篇、第五論文は、一九五七

年のものである。このように大分以前のものを検討の対象にすることに関してはその後の富塚氏の研究の発展という点から考えて礼を失ったことになりはしないかと恐れるのではあるが、ここでは氏の恐慌論ないしは産業循環論のトータルな検討が課題なのではなく、単に「周期的恐慌の一つの物質的基礎」をどのように理解されているのかというその点だけを見ることを目的にしているものであり、そのためにはこの論文がもっとも適当だと思われるので、この論文を検討の対象にしたわけである。この点については林氏の場合も同様である。(念のため)

- (22) 富塚、前掲書(増補版、以下富塚氏『恐慌論研究』からの引用は、すべて、増補版による)、三四四頁。
(23) 同。

しかし、筆者の考えでは、富塚氏は、かかる見解に結論を出す前に今少し検討すべきであったと思われる。

- (24) 同、三四五頁。
(25) 同、三四五頁。だが、なぜ、そのようにとらえてよいのか。この点、必らずしも説得的ではないように思われる。
(26) 同、三八二頁。
(27) 同、三八三頁。
(28) 同。
(29) 同、三八七―八九頁。
(30) 井村喜代子『恐慌・産業循環の理論』有斐閣、一九七三年、六頁。
(31) 同、七一頁。
(32) 同、三二〇―二二頁。
(33) 同、三二二頁。
(34) 同、三二二頁。
(35) 玉垣良典『景気循環の機構分析』、岩波書店、一九八五年、三一八頁。
(36) 同、四七頁。
(37) 同、三一八頁。
(38) 同、三一九頁。
(39) 同、三二三頁。
(40) 同、四六―四七頁。
(41) 一八五八年三月二日付けのエンゲルスにあてたマルクスの手紙。『全集』二九卷所収。ただし、ここでは前掲、久留間編『レキシコン9』の訳文によった。次の注(42)(43)も同様。

- (42) マルクスにあてたエンゲルスの手紙（一八五八年三月四日）。
- (43) エンゲルスにあてたマルクスの手紙（一八五八年三月五日）。
- (44) 前掲、K・マルクス *Grundrisse*, S. 608, 邦訳Ⅲ、六七〇—七二頁。
- (45) K・マルクス著、中峯照悦、大谷積之介他訳、マルクス・ライブラリ3、『資本の流通過程』『資本論』第二部第一稿、一五九—六〇頁。
- (46) 同、一五八—五九頁。
- (47) この点、前稿Ⅱ「周期的恐慌の物質的基礎と回転循環」（神奈川大学経済学会『商経論叢』第二十卷第二号——一九五八年一月所収）での見解と異なる。ここで正しておきたい。